

浦島伝説考

櫻 葉 勇

有限から無限へ

人間は万物の靈長といばっていても、きわめて限られたせまい世界に住んでいるに過ぎない。健康を誇り、長寿者とたたえられる人も、百歳を越える人はめったにない。よし百年の長寿を保ったとしても、宇宙無限の年月に比べれば、ほんの一瞬に過ぎない。また人間が生存し、活動し得る世界は、地球という小さな星の表面に限られている。限定された時間と空間の鉄則は、常に人間の生涯を、完全に律しているのである。

しかし、かような有限の世界に生存する人間は、無限に対して、大きな憧れを持っている。ギリシヤ神話のペガサスは、翅のある天馬であって、自由に空を飛ぶことが出来る。この空想の産物は、古代人が鳥の如

く、自由に飛びまわりたいとの願望が生んだものであろう。

今日、月世界着陸という偉業が達成されたのも、人間の無限への憧れの結果であるということが出来る。人間は、有限の世界に住んで、時間空間の法則に支配されながら、空へ海底へ、そして永遠の生命へと、夢は自由に飛びまわる。浦島太郎のような仙境淹留説話が生れたのも同じ理由からである。

仙境淹留説話には二つの大きな要素がある。一つは所謂仙境で、人間世界に属せぬ別世界で、蓬莱山といひ、常世の国というも同じである。浦島が行った竜宮も仙境の別の呼び方といってよい。

この仙境のもう一つの要素は、当然のことながら、時の錯誤である。浦島が竜宮という仙境で過したのが

三年間であったのに、故郷にかえってみると、数百年という長年月が流れていたのである。

海幸山幸との比較

浦島とよく似た説話として、古事記の海幸山幸の神話があげられる。中田千畝氏の如きは、両説話の類似から、浦島の起原をなすものは、海幸山羊の神話であると説いている。しかし海幸山幸と浦島の間には、根本的に大きな差異があるのではあるまいか。そのことを考える前に、今更必要もないと思われるが、海幸山幸のあらすじを書いてみよう。

大昔、火照命、火折命という兄弟の神々があつた。火照命は海幸彦と呼ばれ、海の方に仕合せが多く、魚がよく釣れた。一方火折命は山幸彦と呼ばれるくらいで、山の獲物に恵れた。

あるとき兄弟は相談して、仕事を取りかえてみることにした。そこで兄の火照命は山へ出かけたが、慣れないことはうまく行かないもので、獲物がちつ

ともなくて、手も足も荊で引っかかれて、傷だらけくたびれもうけで山を下り、浜辺に出てみると、弟の火折命がぼんやり立っている。魚が一ぴきも釣れないばかりか、兄神の大切な釣魚にとられ、どうしたらよいかと思ひ悩んでいたのである。

釣をなくしたときいて、火照命は非常な立腹、釣をかえせとせき立てるので、思い余つた火折命は、しくしく泣いていると、どこからかひとりの老翁が現れた。それは塩土の翁という海のことにも明るい神であつた。

この翁の指図で、海神豊玉彦命の御殿に着き、海神の娘豊玉姫と結ばれた。

やがて火折命が、兄神の釣魚を話すと豊玉彦命は、海中の魚共に城に集るよう命じたが、ただ赤鯛だけが姿を見せない。しらべてみると口に釣魚が引っかかつていた。

火折命はこの釣さえあればと大喜びだったが、美しい姫に引きとめられて、いつのまにか三年を過し

た。

さすがに故郷が恋しくなっただけかえりたいたいというところ、
豊玉彦は、潮満珠、潮乾珠という二つの宝物をくれた。

それから鰐に乗って、もとの国へかえった火折命は、さっそく釣鉤を兄神にかえした。ところがどういふものか、その釣鉤をたよりに海へ出たが、前とはちがって、さっぱり魚がとれない。きつとこれは弟のしわざにちがいないと、おおぜい家来をしたがえて攻めて来た。

火折命は少しもおどろかず、海神からもらった潮満珠を出して高くかざすと、忽ち潮が押しよせて、兄神たちは溺れそうになった。兄神が降参したので、こんどは潮乾珠で水を干かせたが、これからは兄神は、火折命に忠実に仕えた。

しばらくして海の国から豊玉姫が、はるばるたづねて来て、火折命の子が生まれそうだからというので、さっそく海辺に産屋を建て、鶉の羽で屋根を葺いた

が、全部葺き終らぬうちに産気づいたので、「お産をする間、決して中をのぞかないように。」とかたくいいて、いそいで産屋に入った。

のぞくなといわれると、かえつてがまんが出来なくなり、火折命はそうと戸の隙間からのぞいてみてびっくり。美しい豊玉姫の姿はなくて、おそろしい鰐が、産屋の中一ぱいにどぐるを巻いて苦しんでいる。火折命はびっくり仰天逃げてかえったが、それから海陸の往来が絶えてしまったということである。この海幸山幸の古事記神話と浦島伝承との間には、多くの類似点のあることを発見するであろう。

- 1、ともに釣魚にはじまっていること
- 2、ともに不漁であったこと
- 3、ともに海宮に赴くこと
- 4、海宮の壮麗なること
- 5、ともに美女にかしづかれること
- 7、ともに神人の結合であること
- 8、ともに神女が、海中の棲息物の化身であったこと

と

8、浦島は玉手箱を、豊玉姫は産室をあけてみることを禁止されること

9、留まった年数がともに三年であったこと

10、一方は玉手箱を、一方は産室を、禁止に背いて

あけてみることに

11、そのため海陸が絶縁されること

時の錯誤

両説話の間に、このように類似点が多いところから、中田千畝氏の如き、浦島の起原をなすものは、この海幸山幸の神話であろうと説いているが、芦谷芦村氏は、両説話の間に類似点が多過ぎるけれども、仙境淹留説話としての重大要件が欠けていることを指摘し、浦島の方がむしろ古い伝承であって、それが古史神話に混入して、海幸山幸が生れたのではないかといっている。

また高木敏雄氏「比較神話学」の中で、両個の説話は全く同一の形式に属するものであって、浦島が古

史神話に混入して、海幸山幸が生れたものと説いている。

おそらく浦島伝説が、古史神話の中に流れこんだ途中に於て、仙境淹留説話の重要条件がとり落されたのではあるまいか。

では、仙境淹留説話の重大要件とは何であるか。それは時の錯誤である。浦島が竜宮で、歡樂に酔って過したのとは、三年間であったが、この世へかえってみると、すでに数百年という長年月が経過していたのである。

ところが、海幸山幸の神話では、海宮からかえったあとの出来事には、異常な時の経過が伴っていない。即ち浦島のような時の錯誤がないのである。したがって、両個の説話は、外観はなほだよく似ているけれども、本質的に大きな相異がある。

芦谷氏や高木氏の説のように、浦島伝説が起原となつて、海幸山彦の説話が生れたとすると、浦島に見ら

れる時の錯誤が、どうして海幸山幸に備えていないのか、今後の研究に俟たなければならぬ。

海洋民族の漂泊談

浦島伝説のような仙境淹留説話の発生は、おそらく海洋民族の漂泊譚がもとであろう。未開の時代に於ては、交通不便で、海上で航路を見失い、未知の孤島に漂泊することは、いくらもあつたにちがいない。

そんな場合、島の原住民から如何に迎えられたであろうか。警戒心を以て迎えられ、憎悪の的となつたこともあろうが、また同情と畏敬の念を以て迎えられ、島民の女性と結ばれることもあつたであろう。

かくして幸福な年月を過しているうちに、ふと望郷の念が燃え上り、帰心矢の如く、もはや島民の引きとめるのも及ばず、故郷さして舟を出す。このとき愛するものが、記念の品をおくることは、当然のことである。

乙姫は別れを惜しんで、玉手箱を浦島におくつたと

き、おそらく再会を祈り、いつまでも若さを保って欲しいと心こめたにちがいない。

さて漂流者が、幸いに故郷にたどり着いたとき、出発当時に比すれば、故郷の姿がずいぶん変つていたにちがいない。現代のように通信機関が発達していれば、ある程度、故郷の変化を知ることが出来るが、古代ではかえり着くまで、変化した故郷を知ることが出来ないで、その驚異は大きい。

自分の友人、知己がすでに他界していたかも知れないし、父母妻子もこの世にいないかも知れない。天災地変によつて、昔の風物が見られないかも知れない。

漂泊者は、必らず生き残りの人々から、漂流談を求められる。そのとき漂泊者は、種々の技巧を用いて興味をそそつたであろうし、ずいぶん誇張が伴つたであろう。たとえ漂泊した孤島の小さい堀立小屋も、金殿玉楼の竜宮城となつたかも知れない。

袁相根碩の話

このような漂流談は、浦島ただ一つではない。琉球をはじめ、台湾にも、南洋諸島にも類話が発見出来る。実に世界的に流布されている。

滝沢馬琴がその著「燕石雜誌」で、浦島伝説は中国から伝えられたもので、その起原として、袁相、根積の説話をあげているが海と山との相異こそあれ、これも漂泊談であり、仙境淹留説話である。

捜神後記によると、

袁相、根積は獵師であるが、ある日山中で道を失い深い山奥に入った。すると山羊が数頭いたので、そのあとを追って行くと、絶壁の下に小さな石門がある。その中をすべって行ったら、やがて平坦なところに出た。そこには草も木も異香を放っており、小屋があつて、その中に十五、六才の美少女がふたり住んでいた。袁、根兩人を見るとたいへん喜んで招き入れ、ともに夫婦のちぎりを結んだ。それから幸福な日がつづいたが、ようやく故里が恋しくなつた。

ある日、ふたりの女が出て行つた留守に、帰心矢の如き袁、根ふたりは、あわてて逃げ出したが、女共が追っかけて来て、各自の腕ノウをわたし、「これを持ってかえりなさい、しかし決してあけて見てはいけませんぬ」と、かたくいわたしした。

二人はやがて故郷へかえつたが、ある日、根の留守のとき、家人が腕ノウをあけて見た。その形はちようど蓮の花のようである。その花弁を一つ一つはがして行くと、中から小さな青い鳥が飛び出し、どこかへ行ってしまった。

根がかえつて来てこのことを知り、しょんぼりしてしたが、後田の方へ出て行つた。家人が弁当を持って行くと、根は蟬のぬけがらのようになって、田の中に立っていた。中国以外に文化の世界を知らず、中国の文献を唯一のよりどころとして解釈したがっていた徳川時代に於て、馬琴がこの袁相、根積の説話を、浦島の根原と考えたことは、奇とするに足りないが、中国以外に、類似の説話が多く発見されることを知つたら、

馬琴はどのように考えるだろう。

リップ・ヴァン・ウインクル

まだイギリスがアメリカを領していた頃、リップ・ヴァン・ウインクルという男があった。この人の妻はたいへんな奸婦であったが亭主はお人好しで、いつも妻の毒舌を堪えていた。

妻のあまり機嫌がわるいとき、愛犬のウルフを連れて、鉄砲をかついで猟に出た。家にかえるのがいやになり、山の中で薄暗くなるまでうろうろしているとき、どっからか「リップ・ヴァン・ウインクル」と呼ぶ声がする。ふしぎに思って声のする方を見ると、ひとりの男が現れた。近ごろ見なれないオランダ時代の服装をした老爺で、手に酒を入れた容器をぶら下げていたが、リップを呼んで、その瓶を下げて来いといった。リップは酒瓶を下げて、老爺のあとについて行くと、円形競技場のようなところへ出た。そこにはさきの爺に劣らない異様な風をした男がお

おぜいいて、ナインピンという遊びをしていた。

さきの爺は、リップにいいつけて、酒を男たちに酌がせた。リップは元来いける口であったので、こっそり酒を口に入れた。非常に美味だったので、二度三度と呑んでいるうちに、さんざんに酔って、前後不覚に眠ってしまった。

やがて目がさめると、さっきとはちがった草原にねていた。やれやれよく眠ったと思いつつ、鉄砲をとろうとすると、銃身はさび、見るもみじめになっている。

ウルフはどこへ行ったかと、しきりに犬の名を呼んだが、答えるのはこだまばかり。立ち上ってみると、足に元気がちつともない。

足を引きずりやつと自分の村へたどりついたが、自分の住んだ家らしいのが荒れ果てて空家になっている。村の集会所へ行ってみると、見たこともない星条旗がひるがえっている。

リップはおどろいて、自分の知り合いの名を呼ん

でみたが、たいてい死んでいる。それもその筈、リップが家出してから、すでに、二十年の月日が流れていたのである。リップの妻も死んでいたが、幸い娘が生きていたので再会を喜び、平和な生涯を送ることが出来た。

これは、スケッチブックに収められたことよって有名であるが、ハドソン地方の伝説といわれている。これには異説もあるが、漂泊談であることにはかわりはない。

このように、多少の相異はあっても、浦島の類話が、ひろく世界的に流布していることは、有限の世界に生存する人間の無限への憧憬が、如何につよいかを示すものとして興味深いことである。

ついで、浦島の伝説の玉手箱についてつけ加えておこう。竜宮からかえるに際して、乙姫は浦島に玉手箱をおくった。そのとき乙姫は、玉手箱をあけてはならぬと禁止したのであるが、浦島の好奇心は、その禁止

を守るができなかった。

このように、禁止を内容とする説話は、きわめて多い。前に述べた搜神後記の袁相、根碩の説話においても、あけてはならぬと禁止された腕ノウが根碩の家族によってあけられる。この場合は根碩自身ではないけれど、禁を破ることは同じである。

海幸山幸の神話において、豊玉姫がお産をするとき、決して産屋をのぞいてはならぬと、禁止したのであるが、火折命は、その禁を守ることができなかった。

「つるの恩返し」という民話は、薪売じいさんが助けたつるが、人間の娘と化して、見事な織物を織ったが、そのとき、ぜったいに部屋をのぞかないようにと、部屋を見ることを禁止する。その禁を破っておばあさんがのぞき見たため、もとのつるの姿になって飛び去ってしまう。世界には、このような禁止する説話が、はなはだ多いけれども、その禁が守られた話の一つもないのは考えさせられることである。このことについては改めて述べたい。